

この人に聞く

新潟市歴史博物館館長

# 小林昌二さん



略歴

- 1942年 新潟市生まれ
- 1966年 京都大学文学部国史学科卒
- 1972年 同博士課程満期退学
- 1974年 愛媛大学教育学部助手 のち講師、助教授
- 1986年 新潟大学人文学部教授
- 1997年 英・ダラム大、独・テュービンゲン客員教授
- 2008年 新潟大学名誉教授、帝京大学文学部教授
- 2010年 新潟市歴史博物館館長（現在に至る）

編集部

梅雨が一休みの日、信濃川左岸にある新潟市歴史博物館にお尋ねして、小林昌二館長さんからお話を伺いました。  
(編集部)

## 一 歴史学への道

私が歴史学研究を生涯の仕事にすることになったのは、子どものときのある体験からです。小学3年生の頃までは、二部授業が行われていた時代でした。沼垂小学校のとき、学校が終わって家に帰ってくると母が泣いていました。私の家は父が小学校の教員で、母は家で仕立ての内職をしていました。その母の内職の工賃に男女差があり、男性よりいくら上手に仕上げても、いつも女性は男性より低い賃金でした。そのことを母は悲しんでいたのです。そのとき私は子どもながら「変だな」と感じました。

もう一つは高校に入って、島崎藤村の『破戒』を読んだときです。主人公の瀬川丑松が差別に悩む姿に、母の涙する姿が重なって見えました。それが私の社会正義に目覚めるきっかけであり、歴史を学んで差別の根源を知りたいと思いました。また、池政栄先生からは、博識な優しい授業を通して、歴史を学ぶことの興

味深さを体験させてもらいました。

私は自分の将来について、漠然と学校の教員になって生徒と一緒に歴史を学べたらいいと思っていました。しかし、親は「地元の理系に」と願っていました。というのも、私には兄弟が3人いましたから、親は子どもの教育費には苦勞していたと思います。兄は、地元の大学に進学していました。その兄が私に「地元から離れて勉強したい気持ちを大事にしたら」とアドバイスをしてくれたこともあり、私の希望を通すことにしました。そして、新潟を離れて京都大学文学部国史学科に入学しました。

## 二 大学・院生の頃

当時の日本史学界では井上清や羽仁五郎、服部之総そして『中世的世界の形成』を書いた石母田正などの学者が活躍していました。また、「狭い枠での史学研究は問題だ」との風潮が強かったようです。そこで私は、様々な領域について勉強を進めました。この頃は学生運動も盛んで、私も日韓条約反対運動に参加し、「ミロのビーナス」が展示されている美術館前で署名を集めました。

学部の卒業論文のテーマは、「平将門の乱」に関するものでした。『将門記』に登場する農民層の生活に興味を持ちました。これを通して当時の農民層の動きを明らかにしようとしたのですが、不完全燃焼でした。しかし、得ることもありました。論文を執筆していけばいくほど、分からないことが出てきて、新たに追求しなければならぬ課題が見つかったことです。

大学を卒業して高校の教員になろうと、新潟県の教員試験を受けました。ところがいくら待っても採用の話がありませんでした。後で母にきいたら、県教委から採用の話があつたが、私に無断で断つたそうです。そんなこともあつたり、親友が「卒論の執筆に取り組む様子がとても生き生きしていたよ」と評価してくれたりしたこともあり、大学院へ進むことにしました。

私はどんな道に進むにせよ、一生勉強は続けようと思っていました。しかしそのためにどんな勉強をどのようにするのか分かりませんでした。同郷の先輩のアドバイスで学会の世話役をしたり、歴史学研究会や歴史教育者協議会に加入したりして活動しました。その頃になって、私の研究するテーマがようやくはつきりしてきました。そして研究対象を、中世から古代史に

変えました。国家ができあがる以前にも存在していた村落や農民達の生活に関する研究です。

### 三 大学に就職して

大学院を終えて、愛媛大学に就任しました。愛媛大学には、12年間いました。

その後、縁があつて地元の新潟大学で足かけ22年間勤めました。この間、私は日本の古代国家にこだわつて研究を続けました。国家は民衆を幸せにもするが、逆に国家としての秩序維持のために、民衆を拘束して不幸にもします。それは古代国家が国家としてはもつとも原初的存在であるからで、国家の本当の姿がはつきり現れるからです。これらの研究を通して、54歳のときに博士号をいただきました。

1990年、八幡林遺跡を発見し、古代史の解明に役立つ多くのデータを集めました。出土した木簡に赤外線照射して、隠れた文字を解読することもしました。また、八幡林遺跡保存運動にも取り組みました。地域住民とも協同して、署名を集めました。集めた三万余の署名を持って上京し、文化庁に申し入れを行いました。前の歴史博物館長だった甘粕さん、秋田大学に赴

任した熊田さん達と一緒に活動しました。研究の成果を、著書『日本古代の村落と農民支配』（塙書房2000年）にまとめました。

日本古代の為政者は、近世の様に高い城壁で囲まれた要塞のような住居を持つことは少なかったようです。大勢の外敵から攻められると、そんなに長期間耐えられない様な、比較的簡易なものがほとんどでした。

一方、中国や西洋では、都市全体を堅固な壁でしっかりと囲む事が一般的でした。囲い方の違いにも、長い間に培われてきた文化の違いが感じられます。英・独で客員教授として過ごした時期に、様々な城を実地に研究することが出来て、良い勉強になりました。

### 四 定年から今日まで

定年後は主に淳足柵や八幡林遺跡など、ふるさと新潟の地域を研究しています。人によっては地域史の研究を避ける方もいますが、私には違和感がありません。新潟市歴史博物館長を引き受けたのも、そのような考えからです。また、今後は、今までの研究の成果をまとめて、以前からの課題となっている著書を完成させたいと思っています。それは、「聖武天皇」（行基など

仏教徒の活動の高まりと、国家安泰を目指した大仏造営のからみに焦点を当てて）や、「承平・天慶の乱」（平将門や藤原純友に関した騒乱について）に関するものです。

## 五 新潟市歴史博物館では

歴史博物館の展示等を通して、地元新潟の地域おこしに役立って欲しいと思っています。博物館の学芸員に協力して、地域から提供された資料の保存や分析、その活用などを進めています。保存のスペースに限りがあり、ものによっては適切な収蔵機関を選んで、そこに斡旋することもあります。また、子どもの地域学習のためにも、役立たいと思っています。子どもの内在する学力は、学びと遊びの二つから成り立っています。座学一辺倒ではいけません。「博物館入り」というと、いかにも古いものという印象を受けますが、家族連れで面白く楽しんでもらえる施設にしたいと考えています。そのためにも先代館長の甘粕健先生のように、入館者の中に入って気さくに接するつもりです。

編集部注 小林昌二さんの著書

『日本古代の村落と農民支配』（塙書房2000年）

『古代新潟の歴史を訪ねる』

（新潟日報事業社2004年）

『高志の城柵』（高志書院2005年）など

（文責 小東出男・所員）

